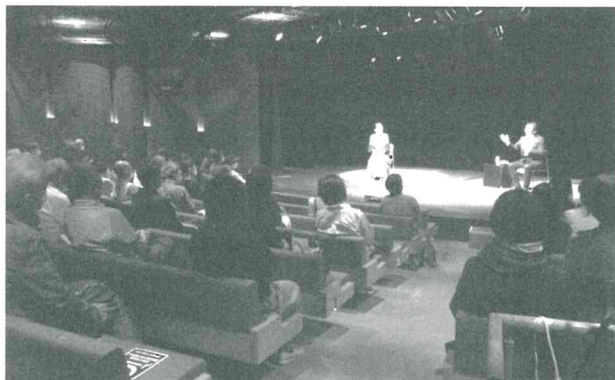


## 「けったいな町医者」が見つめる“生と死”

【上映作品】けったいな町医者(ドキュメンタリー映画 監督:毛利 安孝)

□ ゲスト 長尾 和宏(長尾クリニック・院長)

□ 司 会 水野 晶子(フリーアナウンサー)



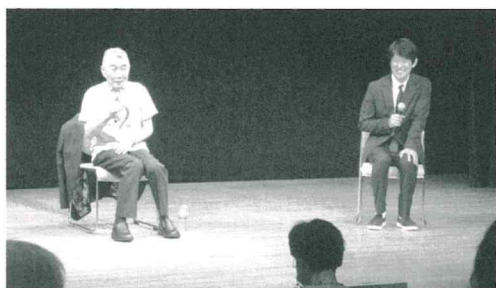
上映作品は、兵庫県尼崎市でクリニックを開業する長尾和宏医師に密着したドキュメンタリー映画『けったいな町医者』(2021年、監督=毛利安孝)。長尾医師は、公益財団法人日本尊厳死協会の副理事長も務めています。患者の「最期まで自宅で過ごしたい」「痛くない死に方がしたい」といった想いを叶えようと長年、在宅医療で多くの患者やその家族に寄り添い、2,500人を看取ってきた町医者です。映画『痛くない死に方』(監督=高橋伴明)の同名原作本をはじめ、『痛い在宅医』など多数の書籍も執筆しています。医療=薬、ともいえる今の医療を警戒し、「薬以外の力でどこまで患者に寄り添えるか?」と考える。クリニックでの診察時も往診時でも人(患者)に向き合い、数十曲もの披露曲を練習して患者の楽しみとなるような盛大なクリスマス会を準備するなど“寄り添い”を実践する日々。ユーモアも忘れない長尾医師は「ツッコミどころが満載で、見られたくないところばかりを切り貼りして完成した映画」と笑いながら言いますが、映像の中には確かに、「全力で私たちに向き合ってくれている」と感じられる姿がありました。

フォーラムでは長尾医師を迎え、フリーアナウンサーの水野晶子さんが、医療のあり方やそれぞれの死の迎え方について尋ねました。長尾医師は「今の医療界は薬を宣伝する場になってしまっている。延命至上主義の日本では、医師の8割が、実際に“枯れて死ぬ”という自然死や平穏死、尊厳死を見る機会がないために知らないし、知らないから信じない。教える人材もない。その結果、在宅医療でも病院と同じような高カロリー点滴ケアを施し、尊厳死ができない場面が増えてきた」と医療の現状を説明します。



客席の女性は、母を看取った際、また自身の病を治療する際に抱いた医師・医療への不信感について話しました。長尾医師は「医療は患者のためにある。しかし日本では、患者の話聞くことやリビング・ウィルを尊重しようという動きが報道されない。自然に迎えられることさえ許されない国になっている。医療を変えるのは市民の声しかない。市民の声を届け、一緒になって医療を変えていこう」と述べました。(参加者:73名)

(フォーラム記録:放送ジャーナル社 福中美紀)



フォーラム①




フォーラム②



フォーラム①



フォーラム②



第41回

# 「地方の時代」 映像祭

地域と人の未来を耕す

＝ 記録 ＝

主催「地方の時代」映像祭実行委員会

日本放送協会／日本民間放送連盟／日本ケーブルテレビ連盟／吹田市／関西大学